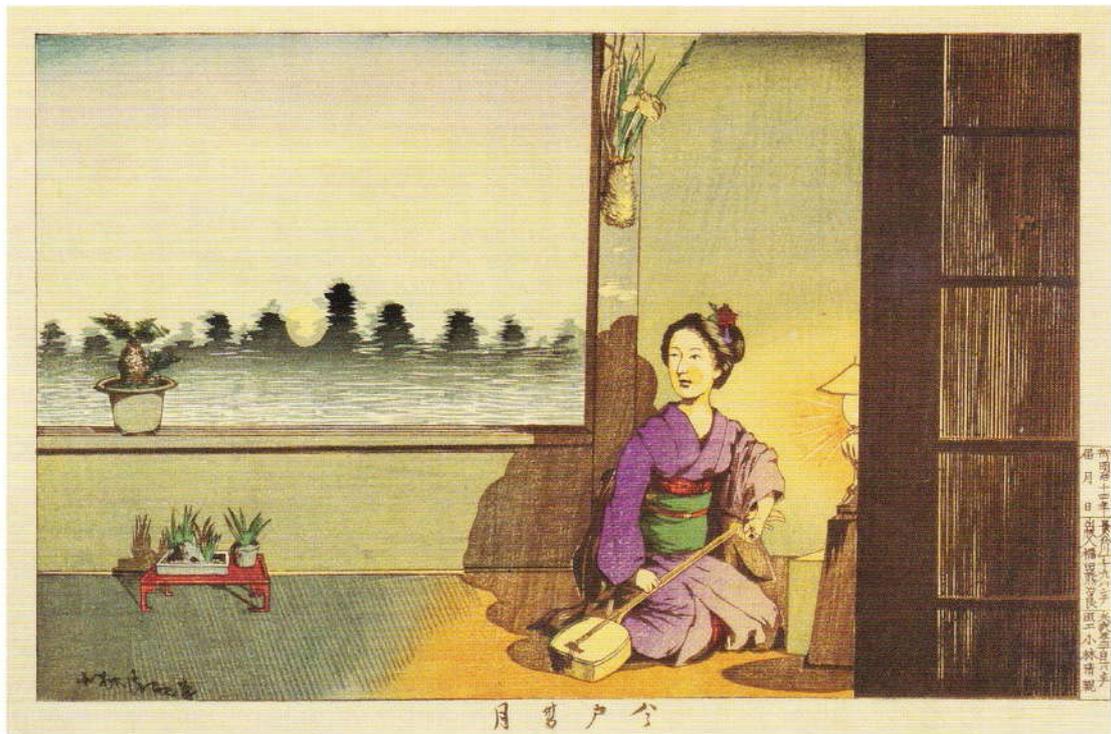




馬頭町広重美術館 友の会ニュース〈第9号〉

風の色



今戸の月

小林清親「今戸夏月」

大判 明治14年(1881) 馬頭町広重美術館蔵

洋燈がぼんやりと娘の横顔を照らしたし、シルエットを背後に映ずる。一輪挿しに活けられたアヤメ、窓際の鉢植えも洋燈の灯りを受けて、くつきりとした陰影を柱や壁に投げかけている。

大きく開けはなつた窓の外に眼を転ずると、木立のなかに満月が浮かび上がっている。

幽けき月光が照らす戸外と、洋燈の灯りが映ずる室内。自然の光と人工の光を巧みに組み合わせ、それぞれの美しさを余すところ無く表現した優品である。

小林清親の「今戸夏月」。一見、水彩画のようにも見えるが、木版画である。

描かれているのは、娘が三味線の稽古をしている私室であろう。三味線をしめ弦の調子を整えながら彼女は何かに気をとられているかのようには彼方をみやる。少しくずした膝の裾がめくられて赤い緋縮緬がのぞいている。娘のふとした夏のひとときを、格子戸の後ろから覗きみてしまったような情感が漂う。

隅田川西岸、今戸橋の北詰にある今戸は料亭や瓦屋が軒を連ねる一角であった。広重も画題として多く取り上げている場所である。しかし、画面にはこれといって今戸を示すようなものは描かれていない。絵師の関心は今戸という場所よりも、もっぱら光の競演という点にありそつた。

小林清親は幕臣の子に生まれ、動乱の明治維新を経て、29歳でようやくデビューを果たした絵師である。清親は明治9年から14年(1876-81)にかけて、江戸から東京へと変貌していく市中の情景を、刻々と移り変わる太陽の光、ランプや提灯の灯りなどを織り交せて描き出した。それらは「光線画」の名称で売り出され、新しい風景画としておおいに評判を得たのであった。

季節感や天候の変化などに注目し抒情豊かな作品を作りたいとした広重の延長線上にありながら、水彩画、石版画、銅版画等の学習を経て、さらに微妙な光を木版画上に再現することに成功した清親。日本の絵画界に大きな一歩を築きあげた彼の業績はもつと広く知られても良いだろう。

*本作品は3月17日(木)から4月17日(日)まで開催の「光と影の浮世絵師 小林清親展」に出品されます。

(学芸員 津田卓子)

心に残る小さな画帳

第6回研修旅行



9月5日 広重美術館前にて

9月の初め、第6回友の会研修視察で山形県天童市の広重美術館を見学してきました。同じ名前ということで、兄弟のような親しみを感じながら出発しました。

ホテルの社長さんが絵が大好きで、集めて美術館を建てるほどになったそうで、こじんまりとした美術館は、ホテルの敷地内にありました。館に入ると天井が高く、吸い込まれそうでした。歌川広重の作品が主で、北海道シリーズが大部分でした。美術館の係りの方々は、穏やかな態度で私たちを迎えてくれ、ありがたく思い、私もあの真面目さを見習わなく

てはと思いました。北海道シリーズはいつ見ても、いつまで見ていると飽きないので、時間があつという間に経ってしまいました。残念ながら社長さんとお会いすることはできませんでしたが、社長さんが集めたと思われる古い画帳のような作品がテーブルの上に置いてあったのを発見した時はびっくりしました。春夏秋冬、それぞれの季節の動植物をさまざまな角度からとらえて対比させて季節感を見事に表現した小さな画帳は、絵の原点を示しているように感じて、大変得をしたような気分になりました。

薄井 キイ(馬頭町)



10月14日 茨城県近代美術館前にて

不思議な世界に導かれ

ボランティア部研修会

「ただ古いものが好き」というだけの私が、広重美術館のボランティアとして仲間入りさせていただいたから6年…。学芸員の先生方や仲間の方たちのご指導により少しずつ理解できるようになり、興味も膨らんで楽しくつとめています。

10月14日、水戸方面―茨城県近代美術館での「ルドンとその周辺」を鑑賞する機会に恵まれました。ルドンは、もっぱら木炭の素描や版画による世界に夢と現実をないませにした怪奇で幻想的な作品で有名です。以前の私なら興味も湧かないまま素通りしていたでしょう。そ



関根理夫先生のご指導で11月28日、12月4日の2回、版画教室が開かれました。50年ぶりに彫刻刀を握り指先の力のなさに老いを感じながらも、下絵、彫りと順調に進みましたが、摺りの段階で足踏みをしてしまいました。絵具の付け具合によつてぼつたりと濃くなったり、薄くなったりと四苦八苦。見当があることにより多色摺りが可能になったということも実感できました。今は先人たちの素晴らしい技術にただただ脱帽するばかりです。

奥村 節子(馬頭町)

れが不思議な世界に導かれ、浸ることができました。気球の中の人間の目、沼の花に悲しげな人間の顔、怪物中心に人間の顔等々。この画家の「生い立ち」と考えさせられています。生まれるとすぐ親から離れ、何もない田舎の村で空想の世界をふくらませ画家を目指したとありました…。なるほどと頷かれその境地から鑑賞すると共鳴するものがあります。ルドンは50歳ころ慈愛にあふれた人物の絵、美しい花々に油絵やパステル等による鮮やかな色彩を用いるようになり、幻想的な絵に華やかさが加わってそれはすばらしいものでした。満たされた気分を後にしました。

岡 イチエ(馬頭町)



川崎町長、藤田館長と共に

祝 入館者30万人達成

馬頭町広重美術館は、11月26日に30万人目の入館者を迎えました。平成12年11月3日に開館、4年あまりでの達成となりました。

これに先立ち、友の会は11月13日に栃木市の長沢碧水、有沢弘一両先生を招いて、入館者30万人記念の薩摩琵琶演奏会「琵琶で聴く平家物語」を広重街道で開催。百名を超す来場者が平家物語の名場面、「敦盛最期」と「那須与一」を楽しみました。

記念すべき30万人目の入館者は、宇都宮市の長谷川光佑さんご夫妻。その前後に来館した茨城県那珂町の増子輝雄さん、埼玉県嵐山町の近藤和子さんに記念品



琵琶の音色に聴きほれる会場

を贈りました。

また、総会で承認されてきました友の会運営等準備預金650万1760円を美術館整備基金に寄付いたしました。

減無料金など改定

3月町議会定例会で、馬頭町立美術館設置等に関する条例が一部改正され、美術館視聴覚研修室がギャラリーとして有料で開放されることになりました。

また、4月28日から高齢者の観覧料が、70歳以上は無料となり、70歳未満は一般料金になります。また、身体障害者等の付添人も半額に免除されることになりました。

浮世絵入門シリーズ「浮世絵ってなんだ？」 「浮世絵版画の制作③」

みなさん、年賀状はどうやって作りませんか？最近では手作りが主流でしょう。なかでもパソコンで作ってしまう方が増えているのでしょうか、以前だと市販の器械（いわゆる「ブントゴッコ」です）を使っているご家庭も多かったと思います。実は浮世絵版画（錦絵）の摺り方もそれと同じような手順を踏んでいます。左の写真は歌川広重「東海道五拾三次之内 庄野 白雨」の摺順りを復元したものです。全部で16工程ありと推測されるうちの6枚をあげてみます。

またした（せひ前号掲載の「浮世絵版画の制作②」もあわせて見てください）。上手に摺るにはテクニクが必要です。基本は薄い色で色面が狭いところから紙と版木の湿り気を一定にし収縮させないこと。全ては個々の摺師の経験と技量にかかっています。

しかしこうして見ていくと、小さなほかしひとつとっても作品が完全となるには欠かせない工程なのだということが実感されます。そこで今回は摺りの違いに注目してみることになります。

（学芸員 津田卓子）



⑥版元印などに赤色を摺り完成!



①主版(輪郭の墨線)を摺る



⑤雨の線、天ばかしを摺る。



②色面が狭く薄い色から摺っていく。笠や蓑などに黄色を摺る



④笠の茶色、坂の緑、衣服の藍、背景の墨など濃い色を一色ずつ摺っていく。



③人物の肌色と背景の薄墨を摺っていく。

今後の展覧会予定

開館5周年記念春季特別展

■ 役者絵ルネサンス! 写楽登場展

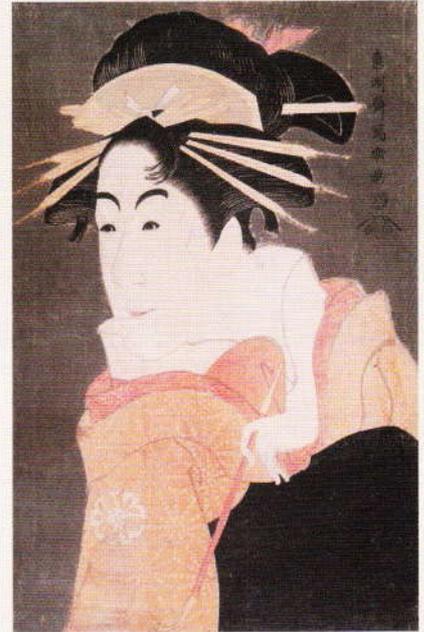
平成17年4月28日(木)～5月29日(日)

謎の浮世絵師、東洲斎写楽。わずかな活躍期間に遺した彼の作品は現在でも国内外で高い評価を得ています。鮮烈な印象を残す写楽の役者絵とその流れを汲む作品を同時展示いたします。

■ 特別展観覧料=大人 700円(630円) / 高・大学生 400円(360円) / 小・中学生 100円(90円)

()内は20名以上の団体料金

※70歳以上、小学生未満は無料 ※障害者手帳をお持ちの方、付き添い1名は半額



東洲斎写楽
「初代松本米次郎のけはい坂の少将、実はしのぶ」(個人蔵)



■ 五十三次名所図会展 —描かれた東海道の名所—

平成17年6月2日(木)～7月3日(日)

「五十三次名所図会」(一般に「^{なご}五十三次名所図会」)は安政2年(1855)、広重が59歳の時に描いたシリーズ。

広重の東海道作品の集大成ともいえる本作品全55枚を展示します。当時の人々と同じ気持ちで旅の雰囲気を感じてください。

■ 企画展観覧料=大人 500円(450円) 高・大学生 300円(270円) 小・中学生 100円(90円) ()内は20名以上の団体料金

※70歳以上、小学生未満は無料 ※障害者手帳をお持ちの方、付き添い1名は半額

歌川広重「五十三次名所図会 大尾五十五 京 三條大はし」

うたがわくによし

■ ユーモアの天才 歌川国芳とその一門展

平成17年7月7日(木)～8月7日(日)

世代や時代を超えて多くの人々を魅了する歌川国芳のユーモア溢れる戯画。明治以後に活躍した門人たちもあわせて、大人から子どもまで一緒に楽しめる浮世絵、約50点をご紹介します。(企画展観覧料)



歌川国芳「猫の当字 ふく」(個人蔵)

馬頭町広重美術館ワークショップ
夏休み子ども美術館①

おもちゃ絵を組み立てよう!

一枚の紙から組み立てる昔のおもちゃ。うまく作れるかな?

7月31日(日) 13:30～

会場/馬頭町広重美術館 視聴覚研修室

問合せ・申込は
美術館(0287-92-1199)まで

うきよえいゆうれつでん

■ 青木コレクション 浮世絵英雄列伝

平成17年8月11日(木)～9月19日(月)

青木コレクションを中心に、歴史物語や小説に登場する英雄(ヒーロー)たち(源義経や弁慶、忠臣蔵の四十七士など)の縦横無尽の活躍ぶりを、庶民の娯楽であった浮世絵を通してご覧いただきます。(企画展観覧料)

馬頭町広重美術館ワークショップ
夏休み子ども美術館②(小学生対象)

ヒーロー だれ
英雄は誰だ!
浮世絵英雄探検!
あのヒーローはどこにいる?

8月21日(日) 13:30～

会場/馬頭町広重美術館 展示室及び視聴覚研修室

問合せ・申込は
美術館(0287-92-1199)まで



勝川春英「牛若丸五條ノ橋逢弁慶ニ因」(馬頭町広重美術館蔵)

平成17年3月24日発行 編集発行/馬頭町広重美術館友の会
〒264-0613 栃木県那須郡馬頭町馬頭1-16-9
TEL:0287-92-1199 FAX:0287-92-7177
http://www.hiroshige-bato.tochigi.jp/

馬頭町広重美術館友の会 ニュース 第9号



歌川広重「東都名所 佃嶋初郭公」(個人蔵)

■ 開館5周年記念特別展 広重画業展

前期/平成17年9月23日(金)～10月23日(日)

後期/平成17年10月27日(木)～11月27日(日)

開館5周年を記念して広重の画業全体を振り返る展覧会を開催いたします。一般に知られる風景画の他にも、役者絵、美人画、花鳥画、戯画、双六、歴史伝説画など歌川広重が手がけたさまざまな分野の作品をご紹介します。

■ 特別展観覧料=大人 800円(720円) / 高・大学生 500円(450円) / 小・中学生 150円(135円)

()内は20名以上の団体料金 ※70歳以上、小学生未満は無料

※障害者手帳をお持ちの方、付き添い1名は半額